

公益社団法人日本青年会議所 北海道地区協議会 2026 年度 会長基本方針

富樫 昭大

1. はじめに

現代の私たちは、複数に点在する構造的な変化と緊張を同時に経験しています。それは、不安定かつ多極化が進む世界と言えるでしょう。世界で広がる地政学的緊張の高まりや、経済環境の変化と不安定性、さらに、北海道に住み暮らす私たちにとっては現実の危機として迫る気候変動問題の深刻化に直面し、明るい未来を描きにくくなっています。変わるべき時にあっても変化を実感しづらい日常への焦燥感は、私だけが抱えているものではないはずです。

もう限界なのでしょうか。できることはないのでしょうか。

40 歳以下の「地域をさらに良くしたい」と願う若者が集う青年会議所だからこそ、できることは確かにあります。その役割を 3 つ挙げるなら、まずは「行動力」。JC は言うだけではなく、実際にやる団体であり、地域を動かす推進者になれる存在です。次に「発想力」。JC はまちに新しい問い合わせられる団体であり、地域外の視点から創造的な問題提起をすることができます。そして「連携力」。JC は地域のハブ的存在であり、世界につながるネットワークを通じて、多様なステークホルダー結びつけ、課題解決への突破口を拓くことができます。青年会議所は、若者ならではの視点で地域課題にアプローチし、次世代リーダーの育成とともに、地域変革のきっかけを創り出す組織です。そして何よりも、誰もやらないなら自分たちがやるという強い意志が集まる場なのです。

私自身、2016 年に青年会議所に入会しました。当初は 3 年間、出向せず地元のみで活動し、退会を口にしたことさえあります。国際組織としての広い機会にも目を向けず、組織の存在意義を自分勝手に解釈していた時期もありました。それでも、多くの同志の温かい言葉や先輩方の叱咤激励に支えられ、悩みながらも前に進む決断を重ねてきました。青年会議所は、成長したいと思えた瞬間から、あなたの人生の舞台になります。世界中に同じ志をもつ仲間との出会いが待ち、多様な価値観の共存から生まれる利他の精神は、愛するまちを幸せな社会へと変える力をもっています。もちろん、その変化は簡単ではありません。しかし、不安があるからこそ挑戦する価値があるのです。今しかできない、今だからこそ行動を起こさなければならない、そのかけがえのない時間を噛みしめながらも少しだけ自分を信じてほしい。きっと、見える世界が変わるような経験があなたを待っています。人生史上、最も大きな夢に触れられる 1 年にしていきましょう。

2. 希望溢れる未来へ

北海道には、日々の暮らしに直結する地域課題が山積しています。冬の吹雪や路線バスの減便で移動に不便を抱える人、暖房費や光熱費の高騰で生活が苦しくなる家庭。過疎化が進む地域では、病院や介護施設が遠く、安心して暮らせない不安があります。若者は仕事を求めて都市部へ流出し、農業や漁業を継ぐ担い手も減少。学校の統廃合で子どもの通学や学びの機会が制限され、まちからは活気が失われています。たとえデジタル技術の進化によって未来の可能性が広がったとしても、解決には多くの困難が立ちはだかっています。しかし、北海道は同時に無限の可能性を秘めた土地でもあります。豊かな地域資源に恵まれ、手つかずの大自然や四季折々に表情を変える景観、世界に誇れるグルメや体験型のアクティビティは、今も国内外から多くの人々を惹きつけています。つまり、課題が山積しているからこそ、それを乗り越えた先には、希望に満ちた未来を描くことができるのです。

私たちは、この北海道を舞台に地域の可能性を未来へとつなぐ運動を展開してきました。広域分散型のフィールドで、2012年から名称を変えながらも事業を継続し、各地域の特性を生かし合うオール北海道の取り組みを積み上げてきました。そこには、ただ一つの地域を良くするのではなく、全道が連携し、道民一人ひとりの行動を喚起していくという大きな志が込められています。もちろん、挑戦の道は決して平坦ではありませんでした。年々姿を変える社会課題に直面し、思い描いたイノベーションを道内各地に広げ、道民に共感を得ることがどれほど難しいかを痛感してきました。小さな成功事例を積み上げても、それを地域ごとに再現性のあるモデルへと昇華することの困難も経験してきました。それらは、これまでの挫折から得た最も大きな学びです。だからこそ、今後は価値のある社会開発運動を通じて、北海道をハイブランディングすることが必要です。その実現には、パートナーとの連携不足から生じるミスマッチを避け、互いの強みを最大限に生かし合うことが欠かせません。デジタルの力と人の力。すなわち、地元に息づく知恵や糧を融合させ、自然環境や観光に配慮したサステナブルな事業を構築する。そして、ブランド王国北海道を舞台にした地域経済再構築のモデルケースを社会全体へと発信していくことに、情熱と使命感を燃やしていきます。地域が稼ぐ力をつけることは、人を呼び込み、定住や交流を促す力となります。その循環を生み出せるのは、青年会議所のもつネットワークがあるからこそです。先頭に立ち、理想を分かち合う仲間と連携し、地域に必要な事業を自らの手で形にしていく。まさしくそこに、私たちにしかできない地方創生の姿があります。

いま、この瞬間にも北海道は大きな岐路に立っています。課題を課題のまま次世代に引き継ぐのか、それとも希望にあふれる未来へと変えていくのか。その選択をするのは、私たち自身です。

「誰もやらないなら、私たちがやる。」

この強い意志を胸に、青年会議所が北海道の未来を切り拓く原動力となりましょう。持続可能な自立経済圏を確立し、全国へ、そして世界へと誇れる地方創生のモデルをつくり出すために、共に挑戦し続けましょう。

3. 平和実現に向けて

北海道は、知床の世界自然遺産やアイヌ文化に代表される開拓の歴史をもち、雄大な自然や豊かな食文化と合わせて、世界に誇れる魅力を備えた島です。私たちはこのかけがえのない大地に生まれ育ち、その恩恵を受けながら暮らしています。一方で、ここ北海道には日本とロシアの間で最大の懸念事案である北方領土問題が存在しています。戦後80年以上が経過した今も、互いの主張はかみ合わず、解決の糸口は見えません。次の世代へ正しく理解を継承し、自国固有の領土に対する意識を確かなものにすることは喫緊の課題です。にもかかわらず、残念ながらこの問題への関心や理解はまだ十分とは言えないのが現状です。恥ずかしながら、数年前まで領土問題に关心がなかったのは私自身も同じでした。北海道に生まれ育ちながら、どこか遠い国で起きている出来事のように感じていたのです。しかし今振り返れば、それは「無関心」という最も危うい姿でした。無関心であることは、現状を変えられないばかりか、未来に対しての責任を放棄することに等しいのだと強く感じています。

青年会議所では、昨年度で第56次を迎えた北方領土返還要求現地視察大会の開催や、年間を通じた署名運動を続けてきました。先人たちが積み重ねてきた歩みには重みがあり、搖るぎない決意が込められています。しかし、私たちが描くべき未来は返還すべきか否かという一面的な議論にとどまるものではありません。私たち青年世代に求められているのは、歴史の正しい伝達、外交や安全保障への理解、民間外交や啓発活動を含めた多面的な視点をもち、この問題を自分ごととして見つめ直すことです。大切なのは、感情論に流されるのではなく、事実に基づいた知識を広く共有すること。そして、平和国家としての在り方を学び直し、「国と国」という対立的な構図ではなく「人と人」へと視点を移すことです。教育現場や地域社会において、その機会を意図的につくり出すことこそが、未来への礎になります。そしてその過程で、無関心という態度がどれだけ悲しく、危険なものであるかを一人ひとりが実感することが重要です。

戦争や占領という複雑な歴史に平和の視点を掛け合わせて学ぶ。その学びから育まれる価値観を自らの言葉で未来世代に語り継いでいく。こうした架け橋となる人財を、北海道から一人でも多く生み出したいと願っています。過去を知り、未来をつくる。返還という一方的な議論だけにとどまらず、共存の新しい可能性を模索すること。そこから、日本全国へと問題提起が広がり、やがて世界へと発信されるべき潮流が生まれると信じています。私たち青年世代が、その先頭に立ちましょう。無関心を打ち破り、真の平和を実現するための行動を、ここ北海道から始めるのです。

4. 不確実な未来に希望を照らす

私たちが住まう北海道は、気候、地形、人口動態などが日本の他の地域と大きく異なります。厳しい寒冷地であるがゆえに発生する雪害や寒波、火山や地震リスクの高さ、広大な大地ゆえに災害発生時には対応に時間を要してしまうこと。こうした現実の中で、私たちはこれまで数々の自然災害を経験してきました。近年では、大雨や地震による大規模停電、道路の寸断や物流網の混乱など、生活基盤そのものを揺るがす事態に直面しました。これからの中でも、同じような危機が必ず訪れるという前提で、持続可能な予防策の強化を進めていかなければなりません。

国内全体に目を向けると、老朽化が進むインフラに起因した事故が次々と報告されています。下水道管の破損による道路陥没や橋梁の損傷など、従来型の災害対策では想定しきれない新しい課題も増えています。防災インフラやライフラインの強靭化、さらにはデジタル技術の活用による早期検知や広域連携の仕組みづくりは、すでに待ったなしの状況にあるのです。私たちが愛する地域もまた年々歳を重ね、これまでとは違う「老いる地域課題」が、市民の不安を一層高めています。日本全域において防災・減災は国家的な最重要課題であり、特に広大な北海道においては技術革新と地域の対応力の強化が不可欠です。万が一の事態が起こった時、それは一瞬で命取りになります。だからこそ、私たちは常に準備を怠らず、想定外を想定内に変えていく不断の努力と行動を続けなければなりません。では、何ができるのでしょうか。デジタルの力でどこまで広域連携を強化できるのか。専門人財を人工知能で代替できるのか。確かに技術の進化は、これまで不可能だったことを可能にしつつあります。しかし、技術がいくら進歩しても、最後に命を守るのは人と人のつながりです。地域に根差した人財がリーダーシップを發揮し、形だけの連携に留まりがちな行政、企業、住民の三位一体の連携が、真に強靭な社会をつくる鍵なのです。そのため、まず必要なのは自分の地域のリスクを知ること。備えること、情報を正しく受け取り活用する力を高めること。これは誰かに任せることではなく、私たち一人ひとりが主体となって取り組める課題です。青年会議所は、その最初の一歩を地域に広め、即時実践できる団体です。地域の強靭化は、上から与えられるものではなく、地に足をつけた共創から始まります。それが自律的に備え、連携の輪を広げていくことが、安心で持続可能な未来への道を切り拓きます。

青年会議所の使命は明確です。それは、課題を語るだけではなく、行動に移すこと。これまで培ってきたネットワークと若者らしい発想力、そしてやると決めたらやり抜く推進力を結集すれば、北海道に新しいモデルケースをつくることは決して夢ではありません。例えば、防災教育の普及、デジタルと地域の知恵を融合させた訓練プログラム、地元企業や学校との連携を通じた啓発活動。小さな一歩を積み重ねることが、やがて大きなうねりとなり、全道に広がっていきます。変化の激しい時代だからこそ、挑戦する価値があります。危機を恐れるのではなく、危機を乗り越える力を地域に根づかせていくこと。それが次世代に対する私たちの責任であり、誇りある使命です。一丸となり、北海道から国土強靭化の新たな運動を生み出していきましょう。不安を希望に変えるのは、ほかの誰でもない、私たち自身なのです。

5. 歴史の創造の先へ

私が初めて北海道地区大会に触れたのは、入会した年の 2016 年、函館大会でした。あの時の記憶はいまでも鮮明に蘇ります。メインフォーラムでは有名人をゲストに招き、溢れんばかりに埋め尽くされた会場の熱気に心を揺さぶられ、まるで地域全体が一つになったかのような高揚感に包まれました。そして、五稜郭内で開催された大懇親会では、ご当地の魅力を存分に詰め込んだ設えにただただ圧倒され、自らが所属する青年会議所という組織のエネルギーと可能性を肌で感じた瞬間でもありました。これまでの 74 年もの長きにわたり、北海道地区大会は伝統を育みながら、各地で継承され続けてきました。大会を誇りとする志は、多くの LOM が抱いているものの、やはり単独の LOM の予算規模や人員体制ではなかなか挑戦し難いスケールの大会であることは事実です。しかし、その挑戦の先にこそ、地道な活動では得られない大きな感動があります。地域課題を全道の仲間と共有し、解決策を模索することで視野が広がり、自己成長の機会を間近に感じられること。これこそが地区大会の大きな魅力であり、私たちの存在意義を証明するものだと信じています。

しかし一方で、冷静に現実を見つめなければなりません。北海道地区の会員数は、この 10 年で 3 分の 2 以下にまで減少し、加速度的に仲間の数が少なくなっているのが現状です。どれだけ価値ある活動や、持続可能性を目指した運動を開催していたとしても、組織の認知度や社会的影響力が十分に積み上げられていないければ、その価値の意義は十分に認められず、共感の輪を広げることもできません。私たちは、ただ大会を開催するということに満足するのではなく、誰に届けるのかという確固たる信念をもとに、対象者にとって真に価値を提供し、社会に深い共感を与える戦略を描かなければなりません。

北海道地区大会は、単なる年次行事ではありません。そこには、北海道の未来を考える道民の英知を結集させ、若者の挑戦心をかき立てる。さらに、地域課題の本質に光を当て、新しい時代の一歩を切り拓く力があります。私たちが目指すべきは、伝統に安住することではなく、歴史を積み重ねた先に新しい価値を創造し続けること。青年会議所だからこそ挑める規模で、北海道の魅力を全国に、そして世界に発信していく挑戦を止めてはなりません。

いまこそ、全道の仲間が一つになり、地区大会の存在意義を再確認しながら、持続可能な形でその歴史を未来へつなげていきましょう。過去の栄光にとどまることなく、これから歴史を創造していくという覚悟を胸に、北海道から日本の幸せを創り出す理想の実現に向けて、私たち青年世代が先頭に立って発信し続けてまいりましょう。

6. 効果的な連携で北海道に輝きを

2025年、北海道ブロック協議会が2ブロック制に改革されてから1年が経ちました。この変化は、單なる制度の転換にとどまらず、現実的な実情をより緊迫した課題として突き付けてきました。各LOMに対する支援の在り方が注目されるなかで、ブロック協議会と地区協議会の職責の違いを明確にし、それぞれの強みを生かしながらどのように重点連携LOMと向き合うべきなのだろうか。これは、今まさに全道の仲間たちが直面している大きなテーマであり、私たちが避けて通ることのできない問い合わせもあります。日本青年会議所の定款に定められているとおり、地区協議会は「北海道地区内の総合連絡調整機関」としての役割を担っています。この使命を真に果たすためには、単なる事務的調整に終始するのではなく、課題を共有し合い、支援の具体像とともに描き、そして未来へつなげる架け橋となることが求められます。これまでの歴史を振り返れば、地区協議会はスケール感のある独自事業を展開し、全道規模で社会課題に正面から立ち向かってきました。その歩みの積み重ねが、確かに伝統を形づくってきたのです。

しかし、今私たちが立っている時代は大きな転換期にあります。人口減少、地域間格差の拡大、さらには気候変動や国際情勢の不安定さなど、従来の延長線上では解決できない課題が目前に迫っています。こうした時代背景を踏まえると、地区協議会が単独で事業を展開すること以上に、組織を横断した共創の仕組みを築き、一つのゴールに向けて歩みを合わせることこそが急務であると言えます。

私たちが掲げるべき未来像は、幸せな北海道の創造です。そのためには、日本全国一齊事業を軸としながら、対象者を巻き込み、共感と参加の輪を広げていかなければなりません。単に情報を発信するのではなく、地域住民一人ひとりが自分ごととしてこの運動に関わり、行動を起こしたくなるような仕組みをつくること。それが、北海道という広大なフィールドを舞台に活動する私たちの責任であり、誇りでもあります。さらに、各ブロック協議会との連帯感をこれまで以上に高めることで、地区協議会の存在意義は一層強固なものとなります。オール北海道の挑戦を合言葉に、壁を取り払い、パートナーとの強固な連携を築き、互いを補完し合う関係を育む。その延長線上にこそ、この組織にしか成し得ないブランドマネジメント体制の強化につながります。北海道が一つにまとまり、全道を超えて全国へ、さらには世界へと発信できる組織基盤を築くことが、これから私たちに課せられた使命です。

「分散から共創へ」

仲間の叡智と情熱を結集することで、私たちにしか成し得ない運動が全道各地に波及していきます。その波は、地域を越え、世代を越え、やがて全体を包み込み、新しい未来を切り拓く大きなうねりとなるでしょう。限られた人財だからこそ、一人ひとりの力を最大限に引き出し、効果的な連携を生み出す。その先に、北海道が抱える課題を乗り越え、誰もが幸せを実感できる未来があります。私たちはその未来を信じ、仲間とともに、そして地域の人々とともに、創造の一歩を踏み出していきましょう。

7. 人生を動かす北海道JC

私たちの組織体系は、長年にわたりヒエラルキー型の運営を基本とし、地域社会や経済人、そして若手リーダーを育ててきました。その実績は確かに誇れるものですが、会員減少に歯止めの利かない現状が続いています。このまま衰退の一途をたどる組織なのだろうかと、深い憂鬱に沈む瞬間もあります。しかし、私は信じています。この危機の中にこそ、組織としての本質的な価値と未来への可能性が眠っているのです。私たちの最大の強みは、個々の力だけでなく、組織の統制力を活かして挑戦を最大化し、社会に影響力をもたらせることです。単なる会議や手続きの連鎖ではなく、柔軟に変化する規律を土台に、個人の挑戦やアイデアを組織全体の力に変え、地域や社会に還元できる。それが青年会議所という組織の醍醐味です。限られた人財を効率的に配置し、地域ごとの課題を分析して最適なリソースを集中させることができるのは、この組織だからこそ実現できることなのです。

私は、仲間が壁に直面し、悩み、迷いながらも突き進む姿にこそ真の価値が宿ると考えています。この修練の瞬間を可視化し、共有することで、挑戦が単なる個人の経験ではなく、次世代に受け継がれる財産となります。たとえば、会員が挑戦の過程をSNSや動画、対談記事として発信する。地域での小さな成功体験を学びのストーリーとして組織全体に展開する。こうしたストーリーテリングを通じた「価値の見える化」こそ、次世代リーダーを惹きつけ、組織の存在意義を社会に広く伝える鍵です。私たちは、組織統制と挑戦の文化を融合させることで、成果だけでなく挑む姿勢そのものに意義を見いだす文化を根付かせることができます。物語が共感を生み、仲間を巻き込み、社会に広がっていく。個人では実現できない大きな試みを、組織の仕組みと統制によって形にしていく。これが、私たちの誇りであり、未来を切り拓く力です。さらに、地域や行政、企業、教育機関、そして市民との共創によって、未来を拓く使命を社会に届け、北海道全体に波及させることができます。地域課題解決のプロジェクトを実施し、その成果や過程を可視化して広報、教育、啓発に活用することにより意志が地域社会に伝わり、参加者一人ひとりの成長と地域貢献の両立が実現します。

最も大切なのは、私たちが目指す組織は「入会して良かった」ではなく、「自分の人生が動いた」と実感できる場であることです。個々の挑戦の連鎖こそが、私たちだから成し得る人生を動かす起爆剤なのです。だから私は全員に呼びかけたい。恐れず仲間とともに壁に立ち向かい、組織の統制力を武器にしてまずは一歩二歩踏み出していこう。過去の伝統に甘んじるのではなく、未来を築くための一歩を積み重ね、北海道から全国へ、さらには世界へと広げていけるような誇れるモデルを生み出そう。ささやかなありがとうの輪をつなぎながら、限界をアップデートさせ、組織の運営マネジメント力を武器に躍動しよう。心の準備はできていますか。

8. 最後に

私たちは、確実な未来など存在しない世界に生きてています。結婚や転職、緊張の高まる国際情勢や深刻な気候変動問題、そして、私たちが日々情熱を注ぐ活動でさえ、未来がどうなるかは誰にも分かりません。それでも、私たちは立ち止まることなく前に進まなければなりません。なぜなら、未来はただ待っていても形にならず、私たち一人ひとりが道を選び、突き進むことで初めて姿を現すからです。一つひとつの決断は、小さくとも確実に「変化の種」となり、希望の芽を育てます。青年会議所は、その決断を仲間と共有し、行動を拡張させ、社会に波及させる組織です。たとえ不確実な選択であっても、行動を起こすことでの未来への扉は開かれます。大切なのは、「正しい道を選ぶ」ことではなく、「選んだ道を正しいものとして創り上げていく」という覚悟です。私たちの活動は、まさにその覚悟を育む舞台です。自らの挑戦を通じて、地域を変え、社会を変え、未来を動かしていくことができます。

どうせ行動するのなら、希望を形にしてやりましょう。私たちが生きる今という時間は、二度と取り戻せない、かけがえのない瞬間です。その一瞬一瞬を、人生に、そして地域に刻みましょう。仲間とともに、私たちは不確実な未来に光を灯す者として、進み続けるのです。私たちの創造的な決断が、地域を動かし、幸せな北海道を、そして世界を変えていく。その未来への道は、私たちの手で創られるのです。